

# 研究成果の紹介

## 1 低タンパク質と安定収量を兼ね備えた「どんとこい」の姿とは？

### ねらいと成果

増収一筋の時代は去り、現在は、安定収量と良食味を兼ね備えた品種が望まれている。

兵庫県では、このような情勢の下、良食味品種「どんとこい」を奨励品種に採用した。本品種は、穂数・一穂粒数の多い穂数型品種で、倒伏に強く、栽培しやすいという特徴を持っているため、多肥栽培をすると、収量が増加する反面、乳白米が増加し、外観品質、食味を悪化させる恐れがある。

そのため、品質、食味を落とさず、安定収量を得る方法が望まれていたため、今回、その一方策として、稲の草姿のコントロールによる良質・良食味・安定収量栽培のモデルを作成した。

### 内容

生育量の指数は草丈、茎数、葉中窒素の3項目を用いた。現地試験のデータをもとに、穂揃期の生育目標値を草丈90～96cm、穂数18本、葉中窒素3.0%とした。この生育量で、白米中タンパク質含有率が

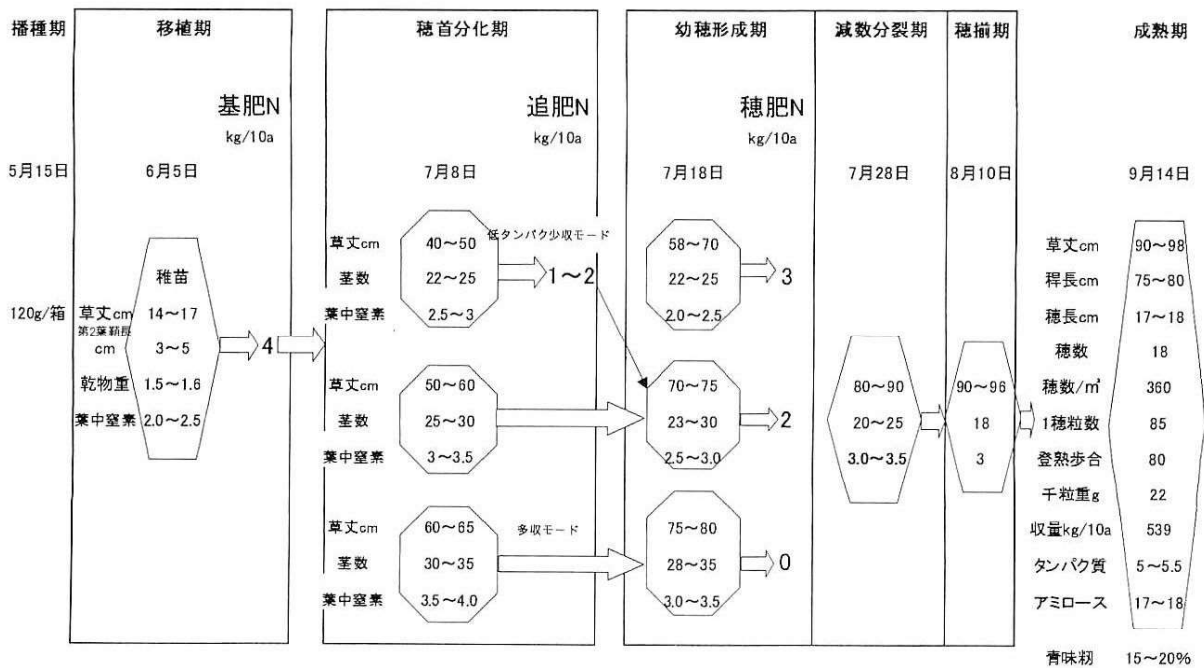
5～5.5%、1株玄米重27g（換算収量539kg/10a）が得られている。「どんとこい」は多げつであるため、夏季高温の県南部では、穂首分化期に茎数が多くなりやすい。そのため、薄まき（乾籾120g/箱以下）、細植え（3～4本/株、20株/m<sup>2</sup>）を心がけ、穂数18本/株程度を目標とする。

生育量のチェックポイントは穂首分化期、幼穂形成期の2回で、減数分裂期、穂揃期の生育量を目標として肥培管理を行う。施肥は原則として基肥・穂肥の2回施用で、生育量が不足すると考えられるときにのみ穂首分化期に追肥を施用し、減数分裂期の穂肥は省略する（図）。

### 今後の方針

さらにデータを集積し、「どんとこい」の生育モデルを充実させるとともに、他品種での生育モデルも作成していきたい。

澤田 富雄（中央農技・作物部）



図「どんとこい」の良食味化栽培・生育モデル